

# 大学生の親子関係と経済意識に関する日中比較

尾島恭子・王彩霞

## A Study of Parents-Child Relationship and Economic Consciousness of Japanese and Chinese Students

Kyoko OJIMA, Cai Xia Wang

### I. はじめに

近年、日本は少子高齢化の進行によって人口構造が大きく変化し続けている。とくに日本の女性の合計特殊出生率は、1960年代後半にはほぼ2.1台で推移していたが、その後低下を続け、2005年には1.26となっており、子どもの数は減り続けている。

また、中国でも通称「一人っ子政策」の実施以降、子どもの数は少なくなり、2000年の第5次全国人口調査によれば、0～14歳の人口が22.89%、15～64歳が70.15%、65歳以上は6.96%であり、第4次全国人口調査（1990年7月1日）と比べると、0～14歳が人口全体に占める割合は4.80ポイント減少した一方、65歳以上が1.39ポイント増加している<sup>i</sup>。

そのような中で、子どもに関わる経済環境も変化している。とくに、子どもの教育にかかる支出は、日本でも中国でも増加しており、日本では、家計の消費支出額全体に占める教育関係費の支出割合は、2003年時には11.8%となり、過去10年間年々高まっている<sup>ii</sup>。

中国でも、子どもの養育費・教育費は年々増える傾向にあり<sup>iii</sup>、「2005年中国統計年鑑」によれば、2005年の中国の教育費指数は、前年に対して103.4という数値となっている<sup>iv</sup>。

このように、子どもの数が少なくなるものの、子どもにかかる費用は減ってはいかない中で、子どもの自立性や協調性を含めて社会性の欠如も指摘されるようになってきた。日本では、

親の過保護・過干渉による弊害についても多く議論されている<sup>v</sup>。また、中国では数少ない子どもが過保護・溺愛の中で育てられることで、「小皇帝」と呼ばれる自己中心的な若者が増えてきていることも社会問題となっており、とくに今後の消費社会にも大きな影響を及ぼすことが指摘されている<sup>vi</sup>。

そこで、本研究では、子どもが現代の消費社会に見合った経済意識を身につけていくためには、親と子の関係を見直す必要があるのではないか、との視点から検討を進めることにした。本稿では日本と中国で実施した調査をもとに、子ども自身の経済意識と親子関係とのかかわりを考察する。

それらにより、日本及び中国における親子関係のあり方、さらには、金銭管理意識等も含めた経済意識の育成を検討する手だてとしたい。

### II 調査の概要

本研究では、上述のように、親子関係と経済意識の育成に関して日中両国の傾向を探ることを目的としているが、そのために下記の要領で調査を行った。

#### 1) 対象者

対象者としては、日中両国の大学生を挙げた。大学生という時期は、社会人期の前段階であり、高校生までの段階と比較すると、経済的にも精神的にも自立が図られる時期だからである。ま

た、それまでの親子関係を客観的に判断することもできると思われたからである。そこで、日中両国で大学生を対象に調査を行った。

## 2) 調査期間・方法及び内容

調査期間は2006年5月末～2006年6月上旬であり、調査方法は、配票調査である。回収数については、日本においては、金沢大学で160票配布、158票を回収（有効回収率98.7%）、中国においては、蘭州大学、西北師範大学、蘭州商学院で合計160票配布、143票回収（有効回収率89.38%）であった。

調査内容は、親子のコミュニケーションのとり方や、親子関係への満足度等の‘親子関係に関する項目’と、お金の使い方や使用の計画性など‘経済意識に関する項目’である。なお、本稿では、集計結果のなかでもとくに取り上げるべき項目について報告する。

## III. 調査結果及び考察

### 1. 対象者の属性

対象者の属性は表1に示す。

表1. 対象の属性 (%)

項目		国別	日本	中国
性別	男		39.2	64.3
	女		60.8	35.7
兄弟数	1人		8.2	30.3
	2人		46.8	40.8
	3人		36.1	19.7
	4人以上		8.9	9.2
暮らし方	実家から(交通機関を使って)、1時間以上離れた場所で1人暮らし		68.2	76.9
	実家から(交通機関を使って)1時間以内の場所で1人暮らし		7.6	13.3
	家族と一緒に暮らしている		24.2	9.8
アルバイトの経験	アルバイトをしている		70.9	14
	以前していたが、今がしていない		17.1	43.4
	アルバイトの経験がない		12	42.7

親の職業別	国別		中国	
	父親	母親	父親	母親
自営業者	10.8	9.5	58.1	60.2
公務員	32.9	20.9	10.5	6.3
民間企業	50.0	19.0	26.9	17.5
専門・技術職	1.9	3.2	4.2	2.8
パート・アルバイト	0	27.8	0	0
その他	0.6	3.2	1.4	4.2
無職	1.3	15.8	0	9.1
いない	2.5	0.6	0	0

## 2. 考察内容および結果

### 1) お金の使い方についての親の厳しさと予算の計画意識

「お金の使い方について親は厳しいと思うか」という質問に対し、「大変厳しい」「まあ厳しい」と答える学生は、日本ではそれぞれ1.9%、28.7%であり、中国では6.3%、37.1%である。中国の学生の方が、「親はお金の使い方について厳しい」と感じている割合は多い(図1)。

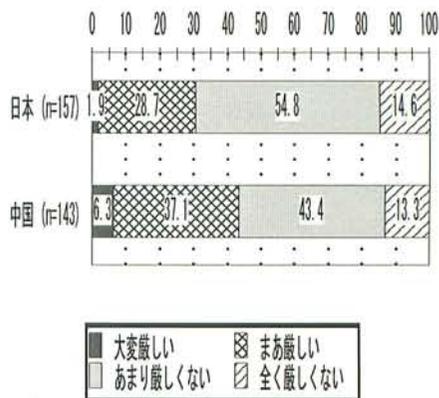


図1. お金の使い方について親の厳しさ

また、「一ヶ月の予算を決めておきたいか」という質問に対して、「大変そう思う」と答える学生は、日本では、32.5%、中国では46.2%であり、中国の学生の方が、一ヶ月の予算を決めておきたいと強く思う学生は多い(図2)。

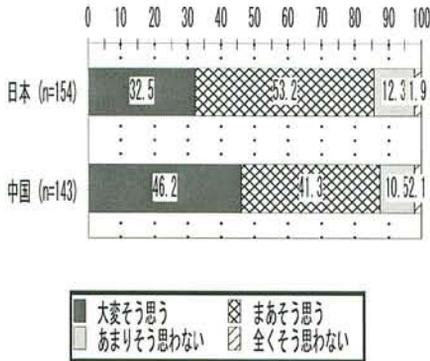


図2. 一ヶ月の予算決めておきたいか

そして、上述の2項目についての関連を検討したところ、図3にあるように、日本側では、「お金の使い方について親は厳しいと思う」学生ほど、「一ヶ月の予算を決めておきたい」と答える学生が多くなっている。しかし、中国側では、日本とは逆の傾向が見られ、「お金の使い方について親は全く厳しくない」とする学生の73.7%は「一ヶ月の予算を決めておきたい」と答える一方、「厳しい」と答える学生のうち、「一ヶ月の予算を決めておきたい」とする者は、38.7%である（図4）。

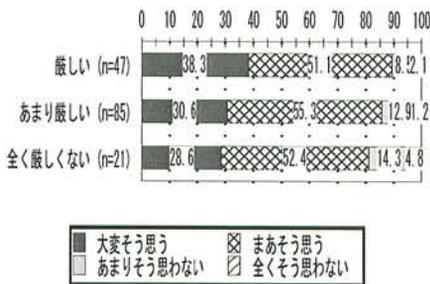


図3. お金について親の厳しさとお金の計画意識の関連性 (日本)

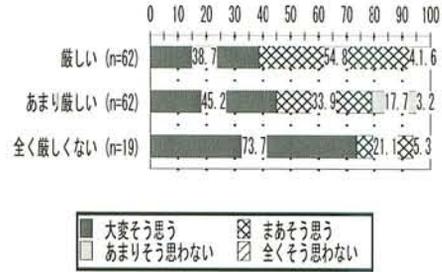


図4. お金について親の厳しさとお金の計画意識の関連性 (中国)

この結果をみれば、日本では、親がお金について厳しいほど予算の計画意識は高く、一方、中国では、親がお金について厳しくないほど予算の計画意識は高いという事実が明らかになってくる。この相反する結果からは、後述するように、いくつかの課題が考えられる。

## 2) レジャー・娯楽費の親への依存度と親子関係への満足度

「レジャー・娯楽費を親に頼っているか」という質問に対し、「大変頼っている」と答える学生は、日本では12.2%であるが、中国では51.0%であった（図5）。

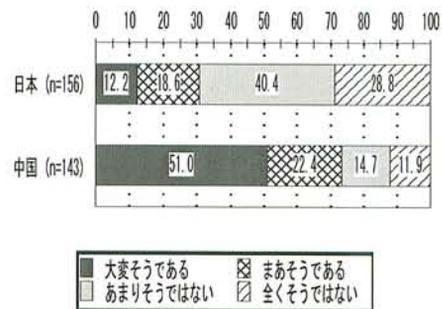


図5. レジャー・娯楽費の親への依存度

これは、表1のアルバイトの経験の有無からも推察できるが、日本の学生は70%がアルバイトをしていると答えている一方で、中国の学生でアルバイトをして、自身で収入を得ている学

生は14%と少ないという背景がある。

また、「親子関係に満足しているか」という質問に対しては、「非常に満足している」と答える学生は、日本では32.1%、中国では41.3%であった（図6）。

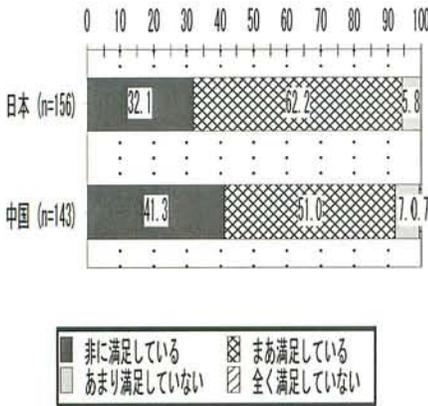


図6. 親子関係への満足度

これらに関連付けてみたものが、図7、図8である。日本側では、レジャー・娯楽費を親にあまり頼っていないとする学生の1.6%、全く頼っていないとする学生の17.8%は親子関係に満足していないと答えているが、レジャー・娯楽費をかなり頼っている、あるいはまあ頼っているとする学生には、親子関係に満足していないと答える者はいない（図7）。また、中国側でも、レジャー・娯楽費を親に「大変頼っている」とする学生の親子関係の満足度は47.9%と最も高くなっていることも興味深い（図8）。

3) 親子関係の満足度と質素な生活の志向性

質素な生活が好きかどうかについて、「質素な生活が好きではない」という項目には、図9のような回答がみられた。



図7. レジャー・娯楽費の親への依存度と親子関係への満足度の関連性（日本）

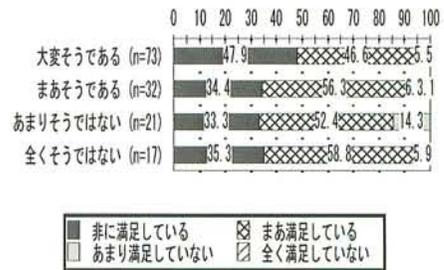


図8. レジャー・娯楽費の親への依存度と親子関係への満足度の関連性（中国）

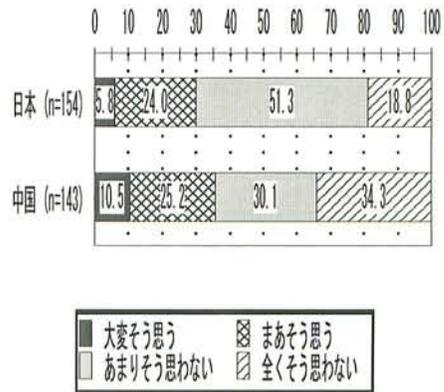


図9. 質素な生活が好きではない

それを上記図6に見た親子関係の満足度と関わらせたものが図10, 図11であるが, 日本側では, 「質素な生活が好きではない」に対し「大変そう思う」と答える割合が, 親子関係に満足していると答える学生よりも, 満足していないと答える学生の方に多くなっている。

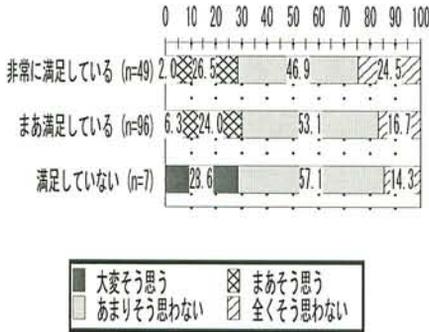


図10. 親子関係の満足度と質素な生活の志向性の関連性 (日本)

また, 中国側でも, 同様に, 「質素な生活が好きではない」に対し「大変そう思う」と答える割合が, 親子関係に満足していると答える学生よりも, 満足していないと答える学生の方に多くなっている。

この結果から, 親子関係の満足度と, 質素な生活を好むか否かについては, 何らかの関連があるのではないかと考えることができる。

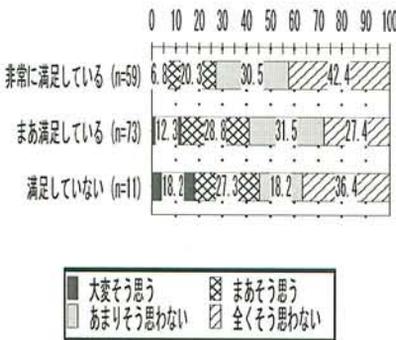


図11. 親子関係の満足度と質素な生活の志向性の関連性 (中国)

4) 親子のコミュニケーションとお金の計画的な使用意識

「親と話すことは好きか」という質問に対して, 日本では「大変好きである」(25.3%)と「まあ好きである」(63.3)と答えた学生を合わせると88.6%となった。中国では, それぞれ14.0%, 62.9%であり, 合計76.9%となって日本よりやや少ない(図12)。また, 「お金を計画的に使いたいか」という質問に対しては, 日本では「大変そう思う」(50.6%), 「まあそう思う」(45.5%)をあわせると96.1%である。中国では日本よりはやや少ないものの, それぞれ57.3%, 28.0%であり, あわせると85.3%となる(図13)。ここで, 日本と中国とを比較すると, 親と話すことが好きではない(あまり好きではない, 全く好きではない), とする中国の学生は, 23.1%になり, 日本より多い割合となっていることを挙げておきたい。

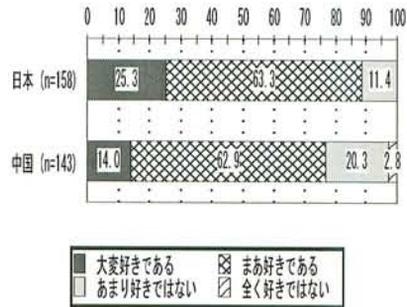


図12. 親と話をすること

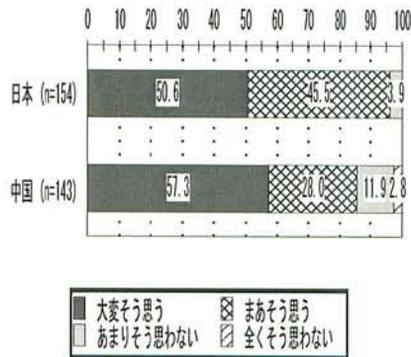


図13. お金の計画的な使用意識

次にそれら2項目の関連を検討すると、日本側では、親と話すことが好きと答える学生ほど、お金を計画的に使いたいとする意識が高く、親と話をすることが好きではない、と答える学生の11.8%は、お金を計画的に使いたいとはあまり思わない、と答えている（図14）。中国側では、日本側ほど顕著な違いは見られないが、親と話すことが好きな学生ほど、「お金を計画的に使いたいか」に対して「大変そう思う」と答える割合が多くなっている（図15）。これらの結果をみれば、親とのコミュニケーションがお金の使用意識に与える影響はあると考えることができるのではないだろうか。

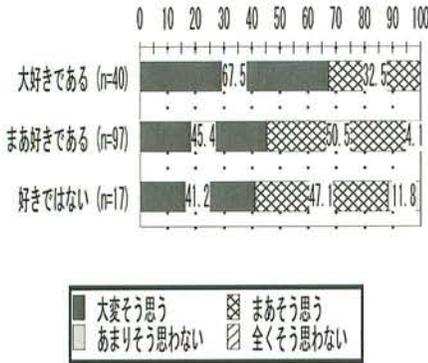


図14. コミュニケーションとお金の計画的な使用意識の関連性（日本）

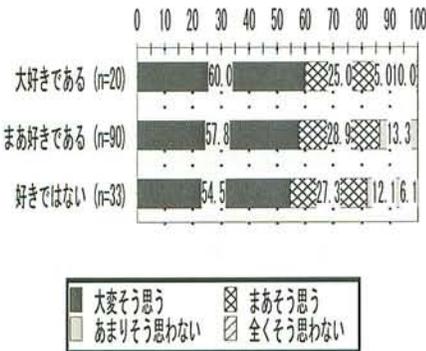


図15. コミュニケーションとお金の計画的な使用意識の関連性（中国）

5) 親の経済状況への認知度とお金の計画的な使用意識

「親の経済状況を知っているか」という問いに対しては、日本では「よく知っている」（12.7%）、「まあ知っている」（59.2%）と答える学生の割合は、合計71.9%であるが、中国側では「よく知っている」（60.8%）「まあ知っている」（36.4%）と答える学生の割合を合計すると、97.2%となる（図16）。

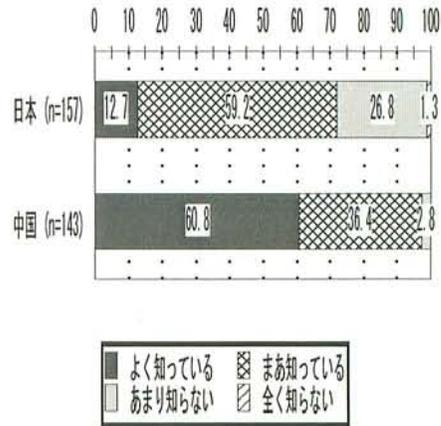


図16. 親の経済状況への認知度

また、お金の使用意識については、上記図13に示したとおりであるが、その2項目の関わりを検討したところ、日本側では、親の経済状況をあまり知らないとする学生のうち、9.3%はお金を計画的に使いたいとは思っていないが、親の経済状況をよく知っていると答える学生で、お金を計画的に使いたいとは思っていない者はいない（図17）。さらに、中国では親の経済状況への認知度と学生のお金の計画的な使用意識のかかわりは非常に強く、親の経済状況を「よく知っている」学生のうち67.8%の者はお金を計画的に使いたいと思っている（図18）。

親の経済状況をよく知っているということは、日頃から家計の問題、あるいは経済的な話題について関心を持っているということであろうか。家庭教育における金銭教育のあり方につ

いて検討の余地がありそうである。

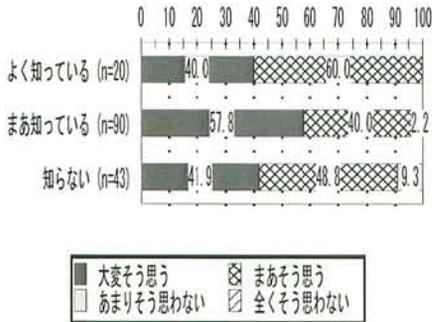


図17. 親の経済状況への認知度とお金の計画的な使用意識の関連性 (日本)

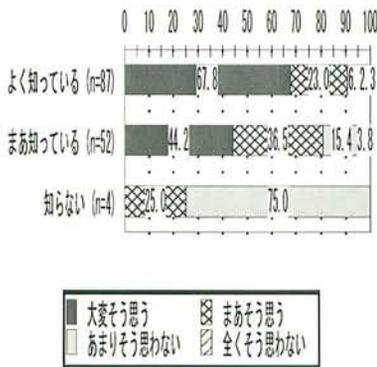


図18. 親の経済状況への認知度とお金の計画的な使用意識の関連性 (中国)

6) 親の価値観の押し付けと学生の自立意識

「親に自分の価値観を押し付けられると思うか」という質問に対して、「そう思う (大変そう思う+まあそう思う)」と答える学生は、日本では27.9%, 中国では40.3%である。また、「社会人になっても、必要があればお金を親に頼りたいか」という質問に対して、日本では「そう感じる」と答える学生は9.6%, 中国では18.2%であった (図19, 図20)。

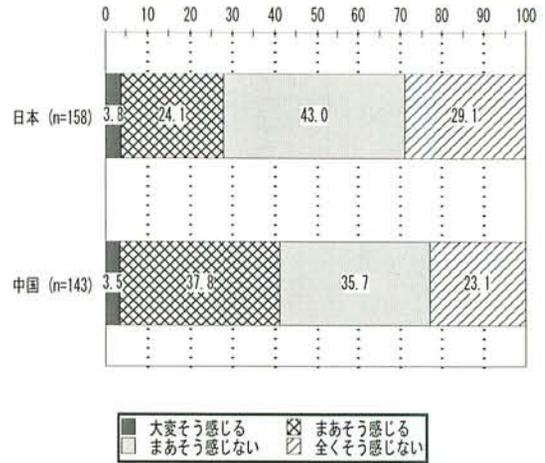


図19. 親に自分の価値観を押し付けられるか



図20. 社会人になっても、必要であればお金を親に頼りたいか

これら2項目から、親のしつけ方と学生の経済的な自立意識についての関連を見れば、日本側では、顕著な差はみられないものの、「親の価値観を押し付けられる」に対し、「そう感じる」とする学生のうち、16.3%の者は、社会人になっても必要であればお金を親に頼りたいとしている (図21)。しかし、中国側では、「親の価値観を押し付けられる」に対し、「そう感じる」と答える学生のうち、30.5%が社会人になっても、必要であればお金を親に頼りたいとしているが、「全くそう感じない」とする学生のうち、頼りたいとする者は、9.1%、逆に「全く頼りたくない」とする学生は66.7%であった (図22)。

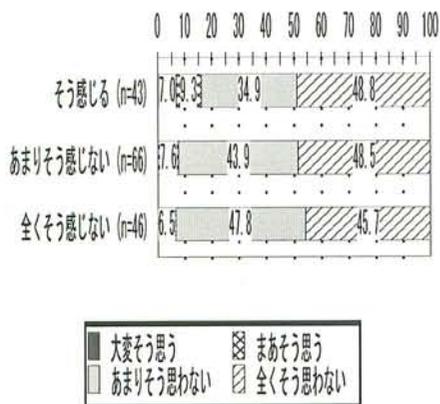


図21. 親に価値観を押し付けられる感じと学生の自立意識の関連性（日本）



図22. 親に価値観を押し付けられる感じと学生の自立意識の関連性（中国）

この結果から、親の価値観を押し付けられていると感じる学生は、いつまでも親に頼りたいと考えていること、すなわち、経済的な自立意識は確立されていないことが明らかとなった。

#### IV. まとめと課題

今回の調査から、親子関係と経済意識とのかわりについて、いくつかの関連性およびそれを踏まえた課題を指摘できる。要約すると下記のようなのである。

##### 1. 日本では、親がお金について厳しいほど子

の予算の計画意識は高く、中国では、親がお金について厳しくないほど子の予算の計画意識は高いという、相反する事実が明らかになった。この結果からは、日本では親がお金のことを子どもに厳しく言うことで、子どももお金に対して関心をもち、また金銭管理の重要性を身につけていくことができるのではないかと推察される一方で、中国では親が厳しすぎるほど、反発して‘好きなように生活したい’という意識が芽生えてくることも考えられる。

これらには、日中の子育て観の相違が大きく影響しているものと思われるが、今回の結果から、「親の厳しさ」について今後の詳細な検討が必要であるとの課題が挙げられよう。

2. 本調査で明らかとなった「レジャー・娯楽費を親に依存している学生は、親子関係に満足している」という結果は、逆にみれば、親子関係の満足度は経済的な援助に大きくかかわっている、という見方もできる。この結果から、親子関係の満足度とはいかなるものであるか、その内容についての詳細な検討が課題として挙げられる。

3. 親子関係に満足している学生は、質素な生活は好きではないとは強く思っていないといえる。これは、上記2の結果とあわせて、今後は親子関係と生活の質素さ、儉約さ、また、経済観念などを含めた「生活観」について関わらせてみていくことも重要であろう。

4. 親と話すことが好きと答える学生ほど、計画的にお金を使用したいという意識が高く、親子のコミュニケーションは、学生のお金の計画的な使用意識に重要な影響を与えるといえる。今後は、単に話すのが好き・嫌いということではなく、コミュニケーションをどのようにしていくことが望まれるのか、その方法についても検討していくことが必要であろう。

5. 親の経済状況を知っているものは、お金を計画的に使用したいという意識をもっている、ということがいえた。親の経済状況をよく知っているということは、日頃から家計の問題、あるいは経済的な話題について関心をもっているということであろうか。経済状況を伝える際の具体的な方策について確認すべき必要があろう。

6. 親の価値観を押し付けられていると感じる学生は、いつまでも親に頼っていたと考えていること、すなわち、経済的な自立意識は確立されていないことが明らかとなった。

子どもの数が少ないということは、それぞれの子どもの親の養育観・教育観が反映されやすい状況になるということも考えられる。経済的な自立との関わりも踏まえた養育観・教育観の検討が求められる。

以上、親と話すことが好きであったり、親の経済状況を知っていたりする学生は、学生本人のお金の計画的な使用意識は高くなっていることが挙げられる一方、親が自分に価値観を押し付けていると感じる学生は、経済的な自立意識は確立されていないことも挙げられた。親子のかかわりがあるか否かではなく、親が子どもとどのように関わっているかによって、すなわち、一方通行ではない親とのコミュニケーションが、

子どもの金銭管理意識等適正な経済意識の育成に影響を与えているということである。

ただ、今回の調査結果から、「厳しい親」に関して日中間ではとらえ方の相違があるのか否か、また、親子関係の満足度と経済的な依存度とはどれほどのかかわりがあるのか、等の課題も挙げられた。

今回提示したいいくつかの課題を更に検討していくことで、日本と中国それぞれの親子関係と子どもの経済意識の育成との関わりについて、具体的な方向性を示唆していきたい。

- i 「中華人民共和国国家統計局編『中国統計年鑑2005』p.95, 2005.
- ii 内閣府「国民生活白書 平成17年版」p.147, 2005
- iii 森 美奈子「変化する中国における家計の消費支出構造」『ASIA MONTHLY』日本総合研究所 2004年11月 (No.44) p.3.
- iv 中華人民共和国国家統計局編「中国統計年鑑2005」p.312, 2005.
- v 例えば原田隆史「子どもの自立を促す 親の過保護や過剰な干渉が自立を妨げる」週刊ダイヤモンド 94(34), p.42, 2006 など
- vi 例えば「「フォーチェン」誌特約 世界の金持ちも舌を巻く「小皇帝」の消費パワー 一億人！中国の一人っ子は「金満 肥満 傲慢」プレジデント 42(22) p.144-147, 2004.など